鎌倉時代における胎蔵儀軌の訓読について

――天台宗寺門派資料を中心として――

松本光隆

目次

はじめに
一、東寺観智院蔵胎蔵儀軌（玄法寺儀軌）一本の訓読語について
二、鎌倉時代の胎蔵儀軌（玄法寺儀軌）における天台宗寺門派資料の訓読語
おわりに

はじめに

鎌倉時代における漢文訓読語は、一般に、平安時代において固定化した訓読語が伝承的に展開されているものと理解されて来ており、鎌倉時代的な言語事象を多くは提供しないと評価されているように認められる。(1) 確かに、例えば、漢籍を例にとると、伝承的性格が強いように認められるが、仏書の場合は、この点に視点をあてては多くが説かれてはいないように認められる。仏書の場合、鎌倉時代における訓読語の展開は区々であったと考えられるところであって、状況によって、その訓読語の様態は、種々存したものと認められる。即ち、鎌倉時代語としての変化を示したものも存する(2)一

方で、平安時代に固定化した訓読を鎌倉時代に伝承的に伝えた資料も存していたと認められるのである。後者の例として本稿は、天台宗寺門派の場合を取り上げて、胎蔵四部儀軌[3]の内、玄法寺儀軌の訓読について論じようとするものである。天台宗寺門派においては、平安後期に複数存した胎蔵儀軌（玄法寺儀軌）の訓読の内の一つが、院政期をへて部分的には改変されながらも、基本的には伝承されて、鎌倉時代の玄法寺儀軌の訓読語を形成していたことを述べようとするものである。

一、東寺観智院蔵胎蔵儀軌（玄法寺儀軌）一本の訓読語について

東寺観智院に蔵される胎蔵儀軌（玄法寺儀軌）の一本に、第二九函第一号として現蔵の資料が存する。奥書は、

（奥書）（朱書）「康平二年（一〇五九）二月廿九日奉隨別處阿闍梨奉始讀
同年三月六日奉讀之了但布字八印未始讀之同學信齊□□□□□
廿三也」（朱書擦消）「此墨點ハ□□房御本□□□」
（朱追筆一）「延久二年（一〇七〇）二月廿九日奉從實相房奉讀從布字
八印已下悲愍而救護已上已了　　僧覺□記之」
（朱追筆二）「持珠當心已下ハ延久二年八月八日奉從別處奉讀了」
（別筆）「延享第三（一七四六）丙寅歲五月十六日令
修復了　　僧正賢賀春秋六十三」

とあり、この奥書より、当該資料が、平安後期の訓読伝受の場に関わって成立した資料であることが知られる。当該資料には、朱墨の訓点が存し、ヲコト点には、西墓点を使用している。朱墨の訓点は、それぞれ二種が存し、朱点は奥書と対応する加点がある。一種は、極薄い朱点で、奥書の康平二年と符合するもので、第二種の朱点は、専らこの薄い朱

点をなぞる形で濃く加点されたものである。この第二種の朱点は、延久二年の奥書と対応するものであると認められる。墨点にも二種のものが存する。第一種は、二種類の朱点の間に加点されたと思しき平安後期のもので、疎らではあるが、全巻にわたる。第二種の墨点は、加点が極めて希であるが、時代は降って、院政期と思しきものである。

まず、考察の対象とする資料における朱点の二種の訓読法の異同は、殆どないと認めて良い。加点上での異同は、濃い延久の朱点が薄い康平の朱点をなぞり落としたと思しき箇所が存する程度で、訓読語が同質であると認めるのに矛盾はない。第一種の墨点は、二種の朱点の間の時期に加点されたものであって、時代的には同時代の加点と見ることが出来るものであるが、朱点訓読との間に、異同が存する。その異同例は、以下に掲げた如きものである。

〔朱点〕

［文の断続・語序の異同］

○［於］劫災（去）の火（訓）に同して
○内拳　風輪を申（へ）て
○旋轉して惠を定に加（へ）て
○身（音）黄金の色に作（りて）
○普く圓―淨の光（訓）を放つ
○涅（上濁）哩底（去）方の大日如來の下に依れり。
○西方の相・均―等なり
○火は胸に入（れ）て前に側はめよ。
○阿（平）毘（平濁）目（去）佉（平）對と
○八―馬車輅の中に

〔墨点〕

○［於］劫災（の）火（に）同（訓）シ
○内拳（平）風輪（を）申ヘヨ
○旋轉（して）惠（を）定（に）加ヘヨ
○身（訓）ハ黄金（の）色（に）作（れ）。
○普（く）圓　淨（の）光（を）放テ
○涅哩底方ニ依テ大日如來（の）下（に）・
○西方（の）相（音）均等ナルコト
○火（は）胸ノ前（に）入（れて）側テヨ
○阿毘目（上）佉ト對セリ
○八馬（平）車（去）輅（上）（の）中ナリ。

○福智　仰けて
○空を並へて

［字訓の異同］

○内―心に蓮華ヲ敷ケ。
○二肘を並へて相ひ近く稍高く竪てて
○次の東の第一に
○千の手に各（の）標リ持レリ
○惠刀羂索を持れり。
○寶（音）の上に
○傘（去濁）の上に
○頭　を側　テ、
○火は胸に入（れ）て前に側はめよ。
○龍（音）を光にし龜（音）を座と爲り。
○諸龍は覆　セて
○天衆　自ら圍繞せり。
○風　空輪の上に絞フ
○遍照（平濁）の眞言を説（き）て曰　く

［音読訓読の異同］

○其の身（音）淺く黄（訓）なる色（訓）なり

○福智　仰ケヨ
○空ハ並ヘヨ

○内心（に）蓮華　敷ケタリ
○二肘（を）並（へて）相（ひ）近　ケテ稍高（く）竪（てて）
○次テニ東（訓）ヨリ第一ニハ
○千（の）手（訓）（に）各（の）標リ持タリ
○惠刀羂索トヲ持タリ。
○寶（の）上ニ
○傘（の）上ニ
○頭　（を）側（てて）
○火（は）胸ノ前（に）入（れて）側　テヨ
○龍ハ光・龜（平）ハ座爲リ
○諸龍（は）覆（て）
○天衆　自　ラ圍繞（せり）
○風　空輪（の）上に絞へ
○遍照（の）眞言（を）説（きて）曰ク

○其（の）身（訓）淺（く）黄（なる）色（なり）

○身（音）黄金の色に作（りて）
○器杖に皆　焔（音）起れり
○自―身―命を
○専―請して
○般若の右の邊（音）に置け
○頭（カウヘニ）に冠（音）して
○皆　黄（去）―暉（上）なり。
○空　水を持せよ
○喜見无比の身（訓）なり。
○而も相―加せよ。
○空　風を持して
○空・地の甲を捻するを
○門（平）（音）東（音）に
○空・竪（音）にせよ
○梵天　紅蓮を持せり
○礫（リヤク）（入）石（入）衆（去）寶（平）を等（音）す。

［助字の訓読の異同］

○而も黒蓮の上（へ）に在り。

［字音の異同］

○身（訓）ハ黄金（の）色（に）作（れ）。
○器杖（に）焔（ホノホ）起コ（れり）。
○自（ミツカ）ラノ身命（を）
○専（訓）（ら）請（音）（して）
○般若（の）右（の）邊（訓）（に）置（け）
○頭―冠（上）（して）
○皆　黄（キ）ナル暉（ヒカリ）アリ。
○空　水（を）持（ト）レ
○喜見无比（の）身（平）（なり）
○而（も）相ヒ加（クハ）ヘヨ
○空　風（を）持（モ）テ
○空ヲモ（て）地（の）甲を捻（ト）ルヲ
○門（訓）東（に）
○空ハ竪（タ）テヨ
○梵天ハ紅蓮（を）持（モ）（平）タ（上）リ（平）
○礫石衆寶を等（ヒト）シク（す）。
○而シテ黒蓮（の）上（に）在（り）

○勤勇（去）の
○金剛牙（上濁）菩薩
○部母忙（去）莽（上）鷄（上）は
○衆に器（上）械を操持せり。
○烏（去）蒭主（上）沙（上）摩（上）
○摧（去濁）砕（平濁）佛・
○圓—滿　錫—杖（去濁）の相にせよ。
○毘（平濁）紐（平）と
○摩羯（入）と
○訶（上）悉（上）多（上濁）（と）を
○尾舎佉と
○金（去）翅（上濁）王と
○尓（上）賀（上）囀もて
○阿（平）毘（平濁）目（去）佉（平）對と
○難（去）徒（上濁）と
○龍王囀（去濁）嚕（上）拏（上濁）
○秤（去）と宮と
○鳩（去）摩（平）利（上）と
○塞（入）建（去）翻（去）童（上）子は

○勤（去濁）勇（平）（の）
○金剛牙（去濁）菩薩
○部母忙莽鷄（平）（は）
○衆に器（去）械（を）操持（せり）
○烏（平）蒭沙摩
○摧砕（平）佛・
○圓滿スルコト錫杖（平濁）（の）相（にせよ）
○毘（去濁）紐と
○摩（去）羯（上）（と）
○訶（去）悉多とヲ
○尾舎佉（上）（と）
○金翅（平濁）王（と）
○尓（上濁）賀囀（上濁）（もて）
○阿毘目（上）佉ト對セリ
○難徒（と）
○龍王囀（上濁）嚕拏（上）ハ
○秤　トノ宮（と）
○鳩摩利（平）（と）
○塞建（平）翻童（上濁）子（は）

○縛（去濁）庾（上）の風天は
○倶（去）妃（上）羅と
○并て阿（去）濕（上）毘（上濁）你（上）と
○毘（去濁）逝耶となり。
○烏（去）頭（上濁）と
○彗（平）流（平）星と

［読添語の異同］

○先の佛（訓）。説（き）たまはく
○次の東の第一に
○堅―惠杵を
○金剛―寶瓔珞あり。
○无量衆・圍繞せり。
○忿迅俱摩羅・
○身（音）黄金の色に作（りて）
○髪（訓）赤（訓）くして
○虎（訓）の皮（訓）に漫（去）跨（平）を用ち（ゐ）たり。
○惠は杵・定は无畏にせよ。
○諸の衆生の爲の故なり。
○惠刀羂索を持れり。

○縛（上濁）庾（の）風天（は）
○倶妃（上濁）羅と
○并（て）阿濕（入）毘你（と）
○毘（上濁）逝耶（となり）
○烏（上）頭（と）
○彗ト流（去）星（上）（と）
○先（の）佛ノ説（音）ナリ
○次テニ東（訓）ヨリ第一ニハ
○堅惠ノ杵（を）
○金剛寶ノ瓔珞（あり）
○无量ノ衆（平）圍繞（せり）
○忿（平）迅（平濁）俱（去）摩（上）羅（上）ハ
○身（訓）ハ黄金（の）色（に）作（れ）。
○髪（カミハ）赤（訓）くして
○虎（の）皮ヲ漫跨（に）用（ゐたり）
○惠（は）杵　定（は）无畏ニ
○諸（の）衆生（の）爲（の）故ニセリ
○惠刀羂索トヲ持（モ）タリ。

○左の肩（訓）に垂（れ）たり。
○左に白傘（サン）（去濁）蓋佛・
○圓―滿　錫―杖（去濁）の相にせよ。
○［於］頭よりも高（訓）（く）せよ
○黑色にして刀を持せよ。
○次第に開―敷すること遍せり。
○龍王囀（去濁）嚕（ロ）（上）拏（タ）（上濁）
○龍（音）を光にし龜（音）を座と爲（セ）り。
○杏（カウ）（去）對生（去）と
○秤（ショ）（去）と宮と
○圓滿なること輪の勢（訓）の如（く）せよ。
○空・地の甲を捻するを
○風を側（ソハ）め屈せよ。
○一切藥叉は
○一切藥叉女と
○水　竪てて二風　屈せよ。
○彗（サイ）（平）流（リウ）（平）星と
○空・竪（音）にせよ
○空を並へて

○左（の）肩（に）垂（タ）レリ
○左ニハ白傘蓋（上）佛
○圓滿スルコト錫杖（平濁）（の）相（にせよ）
○［於］頭（カシラ）ヨリ高（くせよ）
○黑色（にして）刀を持セリ。
○次第（に）開敷（すること）遍（く）セヨ。
○龍王囀（上濁）嚕拏（ナ）（上）ハ
○龍ハ光・龜（平）ハ座爲（タ）リ
○杏（カウ）ト對生（と）
○秤（ショウ）トノ宮（と）
○圓滿スルコト輪（の）勢（の）如（くせよ）
○空ヲモ（て）地（の）甲を捻（ト）ルヲ
○風・測（ソハ）メテ屈（せよ）。
○一切ノ藥叉（は）
○一切ノ藥叉女（と）
○水ハ竪（てて）二風ハ屈（せよ）
○彗（サイ）ト流（ル）（去）星（上）（と）
○空ハ竪（タ）テヨ
○空ハ並ヘヨ

○梵天　紅蓮を持せり　　○梵天ハ紅蓮（を）持（平）タ（上）リ（平）

この異同例は、専ら漢文本文の異同例を掲げたもので、陀羅尼の読みの異同を除外してある。

同一胎蔵儀軌に加点された二種の訓点の異同は、右のとおりであるが、訓読語の異同には、傾向性が認められる。「文の断続」に関する異同は、例外が存するものの、朱点が文を切らない所を、墨点では文を切り、一文が短く訓読される傾向にある。「音読訓読の異同」においては、異同の認められる箇所については、第七例、第十例の二例を除いて、朱点の訓読において音読されているところを、墨点では訓読し、同一個所に異訓を併記している。「読添語の異同」では、朱点に読添語のない個所に、墨点において格助詞「の」「と」、係助詞「は」が読添えられた例が目立つ。読添語の異同のうち、第二十例、第二十五例、第三十一例の三例は、朱点において格助詞「を」が読添えられている個所に関する異同である。これらは、漢文の構文上、国語の「ヲ格」が動詞に先行するとき、朱点は格助詞「を」を読添える。一方、墨点は、格助詞の読添えを行わないと判断される例である。これらの用例数は、必ずしも多くは無いが、例外がない。かかる状況は、朱点に対して異訓を加点した墨点の加点意図が、国語の面から意図的であったことが認められよう。先に掲げた当該資料の奥書が、擦消により情報量が限られるとともに、別所阿闍梨が未勘であって、いま一つ各々の訓読の位置付けが出来ない状態であるが、平安後期に存した寺門派における玄法寺儀軌の訓読について、別所阿闍梨、実相房頼尊系の訓読に対して、国語として対置される訓読語が併存していた事が理解される。

院政期墨点の訓読

〔朱点〕　　〔墨点〕

○朱ク顯（アカ）イコト劫火の猶し　　○朱顯猶（ナ）ホ劫火（の）［猶］（コト）（再讀）シ

右は、資料中にわずかに存する院政期と認められる墨点の異同例の一部を掲げたもので、「猶」字の再読例が院政期点に認められるものである。

二、鎌倉時代の胎蔵儀軌（玄法寺儀軌）における天台宗寺門派資料の訓読語

かかる、訓読語は、鎌倉時代においてどのように展開していったものであろうか。この点を検討するために、鎌倉時代における天台宗寺門派関係の二資料を取り上げることとする。一つは、東京大学国語学研究室所蔵の資料で、その奥書は、

（奥書一）文治二年（一一八六）丙午卯月廿七日伽佐郡於丹州普甲寺書了

同五月廿一日三井平等院流壽光房從□□

御本賜交了卯月十三四五十六日□了覺弁／五十一

（奥書二）（朱書）「文治二年卯月廿七日午時交點了

五月七八九十日三井平等院流壽光房ニテ

奉從受了覺弁五十一」

（別筆）「正治二年（一二〇〇）三月廿七日請之歳次庚申始月次壬午

同卅日壽光房之隨足下請之了／同下四月一日始交　同二日受了」

とあるものである。いま一つは、東寺観智院蔵の資料で、第十九函第二号として現蔵の資料である。その奥書は、

（奥書一）建久六年（一一九五）五月四五兩日於月輪房已講御房御座下

奉受了　　獻尊記

寛喜二年（一二三〇）正月晦日於广訶智房僧都御房御座下

奉受了仰之雖可爲當日自遠所往還不便之間

一日讀之了云、以古本交合奉傳受了追以此本

傳持了　　寛乗記

弘長元年（一二六一）八月十二日於宇治平等院

外僧房奉從聖跡房律師御房供養奉受了

以古本交合御房傳持之本　　長乗記

元亨二年（一三二二）十二月十四日於円明寺之

松房奉從住心院僧正御房奉受之了

同以彼御本書寫交點了

（奥書二）寛喜三年（一二三一）三月十二日於摩訶智房座下奉受了

同聴　幸尊阿闍梨　　寛乗記

弘長二年（一二六二）五月十三日奉從聖跡房律師御房讀尊會儀軌

奉禀了從胎儀軌上巻後次秘密主之分令讀始同十四日下巻奉受了

沙門長乗

元亨三年（一三二三）二月十七日給彼御本書寫之了同廿五六兩

日之間奉隨住心院前大僧正御房奉禀之了

（別筆）「宝暦八歳（一七五八）舎戊寅五月十六日加繕装納金剛蔵了

時定額僧貫首僧正賢賀年七十五戒六十六」

次に掲げたものは、鎌倉時代の天台宗寺門派の訓読を伝える二つの資料の訓読語を取り上げたものである。上段に東大

国語研究室蔵本、下段に東寺観智院蔵本の訓読の例を掲げたものであるが、第一節において取り上げ掲げた異同箇所につき、鎌倉時代の二資料の訓読の様態が如何様なものであるのかを示したものである。

〔東大国語研究室蔵本〕　〔東寺観智院蔵本〕

［文の断続・語序の異同］

○［於］劫（入）―災の火に同し。
○内―拳・風輪を申ヘヨ
○旋―轉（平濁）して惠　定に加へよ。
○身（訓）は黄金の色（訓）に作れ。
○普（訓）く圓―淨の光（訓）を放（訓）（ち）て
○涅（上）哩（上）底（平）方（上）に依て大日如來（の）下に
○四―方の相（音）・均（鬼ン）（平）―等（なる）こと
○火は胸（訓）の前に入（れ）て側（ソハタ）テ（よ）
○阿毘（平濁）目（上）佉（平）ト對セリ
○八―馬（メ）（平）車（シヤ）（去）輅（平）の中（ナカ）なり。
○福―智　仰ふけ（よ）
●空は並へて

▲［於］劫災（去）の火に同くして
○内拳　風輪を申（ノ）へよ。
○惠を旋轉（して）定に加（へ）よ。
○身（訓）・黄（去）金（上）の色（訓）に作れ。
○普く圓―淨の光（訓）を放（ち）て
●涅（上）哩（上）底（平）方の大日如來の下（シモ）に依レリ
○四方の相・均（クキム）―等ナルコト
○火は胸ノ前に入レて側（ソハタ）テヨ
○阿毘（平）目（上）佉（平）（と）對し
○八馬（平）車（去）輅（上）の中（訓）にアリ。
●福・智（平）・仰けて
●空は並へ

［字訓の異同］

○内―心に蓮華　敷（ヒラ）ケたり
○二肘（去）を並（ナラ）（へて）相ひ近（チカツ）ケて稍高（ヤヽタカク）かく竪（て）て

○内心に蓮華　敷（ヒラ）ケタリ
○二肘（去）を並（へ）て相ひ近（チカツ）ケて稍高ク竪（て）て

○次テに東（訓）より第一には
○千の手（訓）に各（訓）の標リ持タリ。
○惠（平）刀と羂（平）索（入濁）とを持タリ。
○寶の上に
△傘（去濁）の上に
○頭ヲ側テて
○火は胸（訓）の前に入（れ）て側テ（よ）
○龍は光（音）・龜（平濁）は座（音）爲リ
○諸一龍は覆ふて
○天衆　自ら圍繞せり。
○風　空輪の上に絞へ
△説（中略）遍照眞言曰

［音読訓読の異同］

○其の身（訓）淺ク黄（訓）なる色（訓）なり。
○身（訓）は黄金の色（訓）に作れ。
○器（去）杖（上）に皆　焔起れり
○自ら（の）身一命を
○專ラ請（音）して
○般若の右（訓）の邊に置ケ

○次テに東より第一には
○千の手に各（訓）の標リ持タリ
○惠刀と羂索とを持タリ。
○寶の上に
○傘（去濁）ノ上に
▲頭を側メて
○火は胸ノ前に入レて側テヨ
◎龍　光に（し）・龜　坐と爲り［龍ハ光　龜（音）ハ坐爲リ］。
○諸龍は覆ふ（て）
○天衆　自ら圍繞せり。
○風・空輪の上に絞へ
△説（中略）遍照眞言曰
△其ノ身　淺く黄なる色（訓）なり。
△身（訓）・黄（去）金（上）の色（訓）に作れ。
○器（去）杖（上）に皆　焔起れり
○自（訓）らの身命を
●專（音）一請して
△般若の右の邊に置け

○頭―冠（上）して
○皆な黄（訓）なる暉（訓）あり。
○空　水を持レ
○喜―見―无―比（の）身（音）なり
○而（も）相ひ加へよ
○空　風を持て
○空もて地か甲を捻ルを
○門（訓）東（に）
●空は竪（に）せよ
○梵天は紅（去）―蓮を持たり
○礫石衆寶を等く（す）。

［助字の訓読の異同］

○而して黒―蓮（去）の上に在り

［字音の異同］

○勤（去濁）勇（平）の
○金剛牙（去濁）菩薩
○部母忙（去）莽（上）鷄（平）は
●衆、の器（去）械（平）を操（去）―持（上）せり。
▲烏（上）蒭（上）沙（上）摩（上）

●頭ニ冠（上）して
○皆　黄（訓）ナル暉（訓）あり。
○空　水を持れ
○喜見無（去）比（平）（の）身（音）ナリ
○而（も）相ひ加（へ）よ
○空　風（を）持て
○空をもて地の甲を捻るを
○門（訓）東に
△空竪
○梵天は紅蓮を持（訓）タリ
△礫石衆寶を等す。
○而して黒蓮の上に在り。
△勤勇の
○金剛牙（去）菩薩
○部母忙（去）莽（上）鷄（平）
●衆（訓）の器（去）械（平）を操（去）持（上）せり
▲烏（上）蒭（上）沙（上）摩（上）は

○摧（去濁）砕（平）佛・
○圓―満すること錫―杖の相（音）にせよ
○毘（去濁）紐（平）ト・
△摩（去）羯と
○訶（去）悉（上）多（上）トヲ
○尾（去濁）舎（上）佉（上）ト
○金翅（平）王と
○尓（上濁）賀（上）嚩（上）（もて）
○阿毘（平濁）目（上）佉（平）ト對セリ
○難徒（上）ト
○龍王嚩（上濁）嚕（上）拏（上）ハ
△秤（去）トノ宮（去）ト
○鳩摩利（平）と
○塞（入）建（平）翻（去）童（上濁）子は
○縛（上）庚（上）風天は
●倶（去）妃（上）羅（上）（と）
○并て阿（去）濕（入）毘（上濁）你（上）ト・
○毘（上濁）逝（去濁）耶となり。
○烏（上）頭（上濁）と

○摧（去濁）砕（平）佛・
△圓―満せる（こと）錫杖の相にせよ
○毘（去濁）紐（平）と
●摩（去）羯（入）と
○訶（去）悉（上）多（上）とを
○尾（上濁）舎（上）佉（上）と
●金（去）翅（上濁）王と
○尓（上濁）賀（上）嚩（上濁）（もて）
○阿毘（平）目（上）佉（平）（と）對し
○難（去）徒（上濁）と
△龍王は嚩嚕（上）拏（上）・
●秤（去）と宮と
○鳩（去）摩（上）利（平）と
○塞（入）建（平）翻（去）童（上濁）子（平）（は）
○縛（上濁）庚（上）風天は
○倶妃（上濁）羅と
○并て阿（去）濕（入）毘（上濁）你（上）と
○毘（上濁）逝耶となり
○烏（上）頭（上濁）と

○彗（平）ト流（去）星（上）と

［読添語の異同］

○先の佛（訓）の説（音）（なり）

○次テに東（訓）より第一には

○堅—惠の杵を

○金剛—寶の瓔珞あり。

○无量の衆・圍繞せり。

○忿迅俱摩羅は

○身（訓）は黄金の色（訓）に作れ。

●髪 赤（訓）くして

○虎の皮を漫—跨（平）に用ヰたり

○惠は杵（上）・定は无畏（平）に

○諸の衆生の爲の故にセリ

○惠（平）刀と羂（平）索（入濁）とを持タリ。

○左の肩（訓）に垂れり。

○左ニハ白—傘（去濁）—蓋（上濁）佛・

○圓—滿すること錫—杖の相（音）にせよ

○［於］頭（訓）より高クせよ

●彗流（平）星（上）と

○次テに東より第一には

○堅惠の杵を

○金剛寶の瓔珞あり。

○無量の衆・圍繞せり。

○忿（平）迅（平濁）俱（去）摩（上）羅（上）ハ

●身（訓）・黄（去）金（上）の色（訓）に作れ。

●髪（訓）赤（訓）くして

○虎（訓）の皮（訓）を漫（去）跨火に用ヰタリ

○惠は杵・定（は）無畏に

○諸の衆生（音）の爲の故に（せり）

［「生」字加点ノ音読符ハ「せり」ノ誤点ナラム］

○惠刀と羂索とを持タリ。

●左（訓）の肩（訓）に垂（れ）タリ

○左には白（入濁）傘蓋（上濁）佛・

△圓—滿せる（こと）錫杖の相にせよ

○［於］頭（訓）ヨリ高クセヨ

○黒―色にして刀を持せり。
○次第に開敷（すること）遍くセヨ
○龍王囀（上濁）嚕（上）拏（上）ハ
○龍は光（音）・龜（鬼イ）（平濁）は座（音）爲（タ）リ
○杏（去）ト・對―生と
○秤（ヒョウ）（去）トノ宮（去）ト
○圓―滿すること輪（音）の勢（イキヲヒ）の如（く）せよ。
○空もて地か甲を捻（ト）ルを
○側（ソハ）メテ屈せよ
○一切の藥叉は
○一切の藥叉女は
○水は竪てて二風は屈せよ。
○彗（サイ）（平）ト流（去）星（上）と
○空は竪（に）せよ
○空は並へて
○梵天は紅（ク）（去）―蓮を持（モ）たり

用例の頭にある○は、先の墨点の訓読に一致するもの（ただし、仮名遣いの差は無視した）、●は、先の朱点の訓読に一致する例、▲は、先の朱点の訓読、墨点の訓読ともに異なる例、△は右の二資料に訓点の加点がないなどの理由により異同の確定できない例を示したものであるが、二資料ともに、○が圧倒的に多数を占めている。二資料の状況には、小

●黒色にして刀を持せよ　（存疑）
○次第に開―敷すること遍（訓）（く）セヨ。
●龍王は囀嚕（上）拏（ナ）（上）・
○龍　光に（し）・龜　坐と爲（セ）り［龍ハ光　龜（音）ハ坐爲（タ）リ］。
○杏（カウ）（と）・對（平）生（去）（と）・
○秤（ショウ）（去）と宮と
▲圓滿セルコト輪の勢の如（く）せよ。
○空をもて地の甲を捻るを
○側（ソハ）メて屈（音）せよ
○一切の藥叉は
○一切の藥叉女は
○水は竪（て）て二風は屈せよ
●彗（サイ）流（平）星（上）と
△空竪
○空は並へ
○梵天は紅蓮を持（訓）タリ

異があるが、東京大学国語学研究室蔵本の訓読において、先の墨点の訓読に一致しない確例は、五例である。一方、東寺観智院蔵元亨三年点において先の墨点に一致しない例は二十一例あって、後者の場合の墨点との異同例が多いが、概ねは、先の墨点の訓読と一致するものであって、このような状況は、鎌倉時代の天台宗寺門派における玄法寺儀軌の訓読が、平安後期の天台宗寺門派内部に存した複数の訓読の内の先の東寺観智院蔵本の墨点の系統の訓読の流れにあることを示したものであると判断される。

おわりに

稿者は、金剛界儀軌を取り上げて、天台宗寺門派の金剛界儀軌の訓読語が、平安時代、とくに、平安時代後期から院政、鎌倉時代にかけて、龍雲房大阿闍梨慶祚の訓読をもとに部分的に改変されながら伝承された伝承性の強い性格の訓読語であったことを論じた[4]ことがあるが、右の検討より、天台宗寺門派の玄法寺儀軌の場合も、現存の資料に依る限り、平安後期に併存した数種の訓読の内のあるものが、時代が降るにつれて部分的に改変されながらも、伝承性つよく伝えられ、鎌倉時代の玄法寺儀軌の訓読語を形作ったものであって、金剛界儀軌の場合と同様であったと認められるものと考えられる。ただ、現在、管見の限りでは、その基となった訓読がどのような性格、すなわち、その訓説がいかなる僧の手になったものであるかの解明が容易な状況にはない。天台宗寺門派関係の玄法寺儀軌の更なる発掘と、訓点資料の調査が解明の糸口を与えてくれるものと期待されるところであるが、今後の課題としたい。

注

1、中田祝夫『古点本の国語学的研究　総論篇』第一編第三章（昭和二十九年五月、講談社）

2、拙稿「真言宗小野流における金剛界儀軌の訓読」（『国文学攷』第一三二・一三三合併号、平成四年三月）

3、拙稿「平安鎌倉時代における胎蔵儀軌の訓読について」（『訓点語と訓点資料』第九十四輯、平成六年九月）
4、拙稿「天台宗寺門派における金剛界儀軌の訓読について」（『継承と展開1　古代語の構造と展開』、平成五年六月、和泉書院）